

山口 優  
イラスト/じゅりあ

# デイス

無職の俺が幼女に転生したが  
どんでもないデイストピア世界で  
俺はもう終わりかも知れない



2 「無職の俺が幼女に転生したがとんでもないデイストピア世界で俺はもう終わりかも知れない…第5話」

山口優（画・Julia）

〈登場人物紹介〉

● 栗落花晶つゆり・あきら

この物語の主人公。西暦二〇一七年生まれの男性。西暦二〇四五年に大学院を卒業したが一〇年間無職。西暦二〇五五年、トラックに轢かれ死亡。再生歴二〇五五年、八歳の少女として復活した。

● 瑠羽世奈るう・せな

栗落花晶を復活させた医師の女性。年齢は二〇代。奇矯な態度が目立つ。

● ロマーシユカ・リアプノヴァ

栗落花晶と瑠羽世奈が新たに所属するシベリア遺跡探検隊の隊長。科学者。年齢はハイティーン。瑠羽と違い常識的な言動を行い、晶の境遇にも同情的な女性。

〈これまでのあらすじ〉

西暦二〇五五年、コネクトーム（全脳神経接続情報）のバックアップ手続きを終えた直後にトラックに轢かれて死亡した栗落花晶は、再生歴二〇五五年に八歳の少女として復活を遂げる。晶は、再生を担当した医師・瑠羽に再生歴世界の真実を告げられる。西暦二〇五五年、晶がトラックに轢かれた直後、西暦文明は一度核戦争により滅んでしまいい、その後、『システム』と呼ばれる世界規模の人工知能ネットワークだけが生き残り、文明を再興させたという。「システム」は再生歴の世界の支配者となり、全ての人間に仕事を与えることで、生活を支え、生き甲斐を与える一方、「システム」に反抗する人間に対しては、「暴力性向修正所」と呼ばれる収容所送りにするなど、人権を無視した統治を行っていた。

晶は瑠羽と共にシベリアで旧西暦時代の遺跡発掘隊に参加することを「システム」に命じられ、発掘隊の隊長、ローマーシユカとともに成田空港に向かう。空港での道中、タクシーの車中にて、ローマーシユカと瑠羽は、「システム」の支配するこの世界の変革を目指していることを告げ、彼女等が向かうシベリアの遺跡にそのヒントがあるかも知れないと明かす。



(1)

俺は「探検服」を着用した俺自身の姿をまじまじと見つめた。

M A G I A が P P G によって相手の情動と行動パターンを照合して人間を識別するという話には一定の信憑性があるように思えたが、それが露出過多な服を着なければならぬという結論に繋がるのかどうか、俺にはよく分からない。ただ、俺が着せられたのが露出過多な服であったという事実があるだけだ。

まず、俺の首からつま先、指先までをびったりと覆う、透明なスーツがある。ただ、これを着ているだけでは俺は全裸と同じことだ。八歳の少女としての俺の身体がそのまま見えてしまう。その透明なスーツの上に、胸と腰を申し訳程度に覆うカーキ色のパンツが付随している。それらは、探検服という名目を保つ為なのか、たくさんの胸ポケットや、尻ポケットを付随させており、それなりに役に立ちそうではあった。

そして、俺は探検服の一部として、バックパックを背負うことになった。そこには M A G I がちょうど入る大きさであり、M A G I を入れることになっているらしかった。「どうだい？」

瑠羽が断りもせず俺の更衣室に入ってくる。俺は思わず胸と股間を隠すように手をやった。

「お、おい！　せめて声をかけろ！」

「何言ってるのかな？　私も君と同じような露出度なんだから、お互い様さ」

瑠羽の言うとおりだった。彼女が着用しているのは俺と同じ透明スーツであった。ただ、彼女が腰につけていたパンツは彼女が着用していたタイトスカートと同じような配色の青色で、胸につけているパンツも青であった。自分に似合う色は「青」と頑固に決め込んで、標準的な色合いを着るのを拒否しているのかも知れない。しかも、白衣を羽織っているのはそのままだ。折角の透明スーツの効果が減殺されてしまうと思うのだが。「……それに気にする必要はないさ。空色照明になれた人間には、それは白っぽく見える。肌色の露出があるとすら認識しないのさ」

「お前は、どうなんだ……？」

「私も再生人類だからねえ。この世界に再生されてから二年つてとこさ。慣れるには至ってないね」

さらりとそう告げながら、俺の身体をじっくり観察してくる。

「ば、バカ！　やっぱり裸に見えてるんじゃないか！　見るな！」

「いいじゃないか。女子同士なんだし。気楽に行こうよ」

「俺はもともと女子じゃない！」

「じゃあ、その身体も、もともとは君のものじゃないんだし、もっと自由に露出していいんじゃない？」

「……む。そうか……」

俺は一瞬考え込んだ。それから顔を真っ赤にして言い返す。

「それはやっぱり違うだろ！ 今は俺の身体だよ！」

「はっはっは！」

瑠羽は高らかに笑い、それから急に真面目な顔になった。

白衣の胸ポケットの瑠璃色のペンを押す。

更衣室の空色の照明とフレーザーが消えた。

「……まあ、探索のクエストの間は、ずっとその服なんだから、文句を言わず慣れていくしかないよ。それが『システム』の支配する世界で賢く生きていくための知恵さ……。君はジョブを与えられ、パーティに所属させられ、クエストを与えられ、そしてその服を着ることになった。その一切について、君には異議を申し立てる権利はないのさ……。」  
それから、俺の後ろに回り、背負ったバックパックのベルトを調整してくれた。まるで母親のように。

7 「このMAGIも、MAGIコマンドによって我々をサポートしてくれる存在ではある

8  
が、『システム』すなわちMAGIネットワークの一部として、我々を監視するものもある」

耳元で静かに告げた。

「MAGIコマンド？」

「略してMAGIC。君もおいおい覚えていくと良いよ。MAGIネットワークにコマンドを送信し、オンデマンドで様々な効果を得ることが出来る。実際、便利だよ」

瑠羽は瑠璃色ペンの頭をタップした。

空色の照明が戻る。

彼女は、腰にぶらさげていた青いタクト——その先端には青い宝石がある——を手に取り、こう言葉をかけた。

「MAGIよ、我が仲間を治癒せよ——ヒール！」

途端に、俺は全身がほてるのを感じた。タクシーに座りっぱなしだったことよって生じた疲労感が一気になくなる。

「……なんだこれは？」

「君の着用しているスーツにはアドレナリンや各種の生体麻薬、あるいは治療薬のようなものが仕込まれていてね。医師の処方に従ってそれをスーツの着用者に送り込むこと



が出来るのさ」

「医師の処方？」

「この私のMAGIコマンドだよ」

胸を張って答える。

「私は医師だから、スーツに仕込まれた治療薬を処方するようなMAGIコマンドの実行権限しかないけれど、君はフリーターだから、必要に応じて様々なMAGIコマンドの実行権限が与えられるはずだよ。『システム』が認定する君のレベルに応じてね」

「たとえばどんなのがあるんだ？」

俺は思わず興味をそそられてしまい、尋ねる。

「……そうだねえ、再生歴の世界のフリーターに与えられるクエストで多いのは、警備業務や廃物処理業務だけど、例えば警備業務だと、警備デバイスをアクティブにするMAGIコマンドが与えられる」

そうそう、といって瑠羽は背負ったバックパックに器用に手を回し、警棒のようなものを取り出した。

「こういうやつさ。これは君用にもらってきたものだけどね」

そう言っ手渡す。瑠羽のタクトと同様、先端には宝石がある。但し、色は青ではな

10 く、赤であった。

「MAGIICクラブ。MAGIコマンドで電撃を発生させることが出来るよ。レベルが上がって廃物処理業務もできるようになるよ、広範囲に火炎などを発生させるMAGIコマンドの実行権限も与えられたりする。——まあ、全ては『システム』次第だけど」  
俺は呆れた。

「それも『システム』の認定で決まるのか。人間の自由はどこにもないんだな」

「レベルを上げる自由はあるよ」

にこにこして告げる。それから瑠璃色ペンをタップ。

「尤も、それだけだけどね。くだらない世界さ」  
低い声で告げる。

再び瑠璃色ペンをタップ。明るい表情を作る。

「……ちなみにロマーシユカのジョブはサイエンティストだから、彼女もいろいろなMAGIコマンドが実行できる。このジョブには、調査研究という名目があれば、ヒーリングのような治療薬の処方コマンドの権限も、廃物処理のための広範囲に火炎を発生させるコマンドの権限も与えられる。多様なジョブがある中で、最もMAGIコマンドの実行権限が幅広いのがサイエンティストじゃないかな」

俺はどんよりした顔になった。

「ああ、分かったよ。医者のお前が祈祷師、フリーターの俺が勇者、サイエンティストのロマーシユカは魔法使いか……。MAGI ネットワーク——『システム』とやらは、全人類に仕事に偽装したRPGをやらせてるだけなんだ……。それだったら、人類全員をひきこもらせてゲームでもやらせ、社会に必要な仕事は全部MAGIでやったほうがいいんじゃないか？」

俺がしゃべっている言葉の途中で、瑠羽が慌てて瑠璃色ペンをタップしていた。

「ああ……まったくだね……。でもね、君のように聡い人間ばかりではないんだよ。配布される仕事が偽装されたものだど気付かず、やりがいを感じてやっている人間も多いのさ。そういう人間にとっては、ただのゲームと、GILDによって配布される仕事はやはり違うものらしい。本質は同じだと思うけどね」

それから、急に俺を抱きしめた。

「むぐ……」

豊かな胸に俺の顔がうずもれる形になる。

「急に『システム』批判を始めてくれるなよ。ひやひやしたじゃないか。こう見えても、

11 君のことは私たちの大切な仲間だと思ってるんだよ？ 仲間が収容所に連行される絵は

12 見たくないよ。いいかい？」

「む……分かった」

「よろしい」

瑠羽は俺を解放した。

瑠璃色ペンをタップ。明るい顔を作った。『システム』の提供する世界を心底楽しんでるかのような。

「さて！ 君の装備とMAGICの説明も終わったことだし！ そろそろ遺跡探索の冒険の旅に出発しようじゃないか！ ロマーシユカも待っている。シベリア行きの飛行機でレッツゴーだ」

(2)

飛行機はアントノフ二二五「ムリーヤ」であった。西暦の世界では、世界最大の飛行機として有名であったが、生産機数はごく僅かであったはずだ。それが何機も成田空港に並んでいる絵は壮観であった。

「すごいな……。『ムリーヤ』がこんなに並んでいるとは」

「システムは西暦世界の再生を意図して再生歴の世界を運営していますが、一方で効率

性も考えています。『ムリーヤ』のような巨大な旅客機の方が効率が良いという判断でしょう」

ロマーシユカが解説する。

俺達は、成田空港のターミナルで、漫然とシベリア行きのムリーヤに乗り込むのを待っているところだった。ロマーシユカ、俺、瑠羽の三人は探検服を着込んで出発ロビーのソファに仲良く並んで座っている。

俺達の他にも、ポピガイ・クレータ―遺跡の探索班がロビーで待っており、それは一機のムリーヤを一杯にさせるほどの大人数だった。

俺の観察するところ、男女比は有為に女性の方が多く、大半はかなり若い。二〇代前後の人間が多いのではないだろうか。遺跡探索は体力仕事だろうから、若い人間が多いのは理解できるが、なぜ女性が多いのだろうか。

「あまり男がいないな……?」

俺が呟くと、瑠羽がその疑問を引き取った。

「男性は、『暴力性向修正所勤務労働者』のジョブを与えられて、楽しく仕事をしている人が多いみたいだよ? まあ、『システム』がそれぞれの人に合った仕事を与えてくれる

13 からね! 素晴らしい世界じゃないか」

14 流石に、ロビー全体の照明とフレーザーを操作することはできないのだろう。楽しげ

な会話で真実を伝えてくる。

「……ああ、なるほどな」

俺は中途半端に納得して、頭の後ろで手を組んだ。そのとき初めて、俺は瑠羽が俺を女とし、しかも非力な幼女としたことの深慮の一端を——納得はしないもの——理解した。

「そういえば、『ムリーヤ』って滑走路が長くないと離陸できないんじゃないか？  
成田の滑走路で大丈夫か？」

「西暦時代の成田空港の滑走路が『ムリーヤ』にとって短すぎたかどうかは、私はよく知りません。けれど、この空港の滑走路は西暦時代よりも大幅に拡充されているはず。必要な土地は『システム』がちゃんと収容したそうですよ」

ロマーシユカが教えてくれる。

「もともとの土地の持ち主は？」

俺の問いに、彼女は真面目な顔で言った。

「土地の所有権というのは西暦時代の概念です。この世界は全て『システム』が管理していますから。誰かがそれに反対したとしても、『暴力性向修正所勤務労働者』のジョブ

を与えられるだけですわ」

「ああ、なるほどな……」

俺は再びそう呟いた。

全く、素晴らしい世界だ。

出発ロビーを見渡すと、探検服を着た遺跡探索班の人々は、それぞれのパーティに別れてかたまり、みな楽しげにおしゃべりをしている。瑠羽によれば、大半は『システム』が与える仕事を何の疑問もなく受け取り、やりがいを感じているそうである。

人々の楽しげな様子を見て、俺は瑠羽の言うことにも一理あるな、とふと思った。

自由主義経済においてつらいことは、下手をするといつまでも仕事を与えられないことだ。俺は第二氷河期で就職に失敗してからほとんどまる一〇年、ひきこもってゲームをして過ごしていた。ゲームばかりをしたかった——というわけではない。俺はそれで納得できるタイプの人間では、残念ならなかった。

就職活動はずっと続けていたんだ。

ただ、俺のスキルに相応しい仕事がいっまでもいつまでもいつまでも見つからなかった。

それだけだった。

16 「どうしたのです？ 何か悲しいことでも？」

ローマーシユカが心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。俺はびっくりして瞬きした。そして、頬に流れる液体に気付く。

どうやら泣いていたようだ。

肉体が幼く、感情制御が下手になったのか。

俺はごしごしと涙を拭いた。

「いや……なんでもないさ。きっと目にゴミが入ったんだ」

その時流れたアナウンスが、俺達に飛行機への搭乗を促した。

(3)

ポピガイ・クレーターの赤茶けた大地にムリーヤの影が映る。日本からムリーヤで六時間。機内はこれから始まる冒険への期待にはしやぐ姦しい声で賑わっている。

俺も正直、はしやぐ気持ちでゼロといえはウソになる。

飛行機に乗ったのは久しぶりだった。大学院の頃は、研究のためにいろいろと海外も行っていた。その後一〇年間は、海外旅行どころか、国内旅行も皆無であったので、飛行機にも乗れなかったんだ。



しかも行き先がロシア。

ロシアにはいろいろと懐かしい思い出がある。

俺の研究室はMAGIに代わる新しい人工知能システムの構築をテーマに掲げていたが、当時、そういう研究に興味を示すのはロシアだけだった（中国も、途中までは興味を示していたが、やがてMAGIの優位性に白旗を揚げて、MAGIというプラットフォームで儲ける方向に舵を切った）。

だから、俺は教授と一緒に頻繁にロシアを訪れていた。俺達がよく訪問していたのは、ハバロフスクやイルクーツク、それにクラスノヤルスク。どちらかといえば、シベリアの都市が多かった。瑠羽から聞いた話から推測するに、それが後にMAGIにつながる研究になっていったのかもしれないが、一〇年間研究の世界から遠ざかっていた俺にはよく分からない。

「楽しそうですね？」

俺の隣に座るロマーシユカが声を掛けてきた。三人がけの窓際の席で、ロマーシユカの向こうには瑠羽がいるが、彼女は豊かな胸を支えるように腕を組んだまま、ぐーすか眠っている。

17 正直、露出が激しい服装の女性と隣り合わせで座るのは最初は緊張したが、今は俺も

18 幼女だし、みんな同じ格好だから、飛行機に乗っている内に慣れた。

今も、ローマーシユカの胸の谷間などに視線が行かないように注意しつつ、彼女と会話することに慣れ始めている。

「ああ、そう見えるか？」

「ええ」

彼女は微笑む。

「良かったです。飛行機に乗る前には泣いていらっしやったから、ずっと心配していました」

「——心配をかけたな」

俺は言い、それからローマーシユカに視線を遣って尋ねた。

「ローマーシユカはサイエンティストと聞いたけど、具体的にはどういう研究をしているんだ？」

ローマーシユカは花が咲くように微笑む。そういえば「ローマーシユカ」とは、ロシア語でカミツレソウを意味する言葉だったはずだ。白い花卉と黄色い花序が特徴的な、美しい花だ。

「そうですね、私の専門は古代遺跡ですが、中でも古代遺跡に出現するMAGIAの行

動パターンの研究に今は取り組んでいます」

「なるほどな……そうじゃなかったら、こういうクエストはアサインされないか」

ロマーシユカは首を振った。

「そうでもないですよ？ 古代遺跡の研究が専門でない人もいます。例えば、『ソルジャ』というジョブの人で構成された、MAGIAを倒すことを専門とする班とか。それに、班長がフリーターっていう班も多いんじゃないでしょうか？ 単に遺跡の中で指定された物品——たとえば、あなたのコネクトームが保管されていたような石英デバイスを見つけてくるだけなら、サイエンティストは必要ないですから」

「じゃあ、俺達のパーティはちよつと特別？」

「そうですね……。『システム』から与えられたクエストは、MAGIAの解析ですからね……」

ロマーシユカは言葉を濁した。それ以上詳細な目論見を語れば、『システム』に叛逆する意志を嗅ぎ取られるからかも知れない。

「実はな……俺、西暦世界ではMAGIとは別の人工知能システムの研究をしている……」

俺は遠慮がちに呟いた。

20 「まあ！ M A G I A を研究している私と同じですね！」

ロマーシユカは嬉しそうに言う。

「嬉しいですね。話題が合いそう。ふふ。お話ししてくれて嬉しいわ」  
俺は目を伏せた。

「——話が合うかな。俺は所詮、大学院生として研究してただけだ……。それ以来一〇年は無職だったから、全然研究してなかったし……」

「晶さん」

ロマーシユカが俺の手を握ってきた。

「私思うに、研究者にとって一番必要なスキルは情熱です。あなたがエントリーしようとした企業にも、それに、『システム』にも、情熱は計測できないと思います。あなたは、こんな世界に再生させられ、ひどい目に遭いながらも、前向きに生きていこうとされていきます。言葉を換えれば、情熱を持っています。だから、あなたは研究者に相応しいと思います。私が保証します。だから、自信を持って。ね？」

「そうは言ってもな……」

「あら？ 企業や『システム』の方を、私より信用なさるの？」  
俺は苦笑した。

「分かったよ。あんたを信用することにする」

「その意気ですわ」

ローマーシユカが俺の頭を胸に抱きよせた。

「むぐ……」

俺は彼女の胸にうずもれながら、暖かな感情があふれてくるのを感じていた。

（まあ、やってみるか……。ひどい世界だが、少なくとも仲間には恵まれているようだからな……）

ムリーヤは着陸態勢に入ろうとしていた。